平成２２年度学生支援プロジェクト事業成果報告書

手品でつくるその絆　ふくらめ　バルーン、地域の輪

代表者　　小林洋実　（法学部法学科２年）

１．目的と概要

このプロジェクト事業は、手品を通して老若男女問わず、さまざまな地域の人々と交流し、地域の活性化を図ることを目的にしています。地域のお祭りやイベント、小学校や幼稚園の学童保育などに訪問し、手品・ジャグリング・バルーンアートをして、その楽しさをわかちあうとともに、地域の人々と大学生のむすびつきを強めました。

２．実施期間（実施日）

平成 22 年 4 月 1 日　から　平成 23 年 3 月 31 日まで

依頼があった日時に訪問をしていくというかたちをとっています。

5 月 3，4，5 日　サンポートにてかえっこバザール

7 月 3 日　三豊にて保育園の夕涼み会

10 月 15 日　志度中学校にてショー　　など

３．成果の内容及びその分析・評価等

今年度の活動は、昨年度に引き続き参加型の活動を中心に行いました。そのため、自分たちがサークル活動で日々味わっているマジックの楽しさを地域の方々と分かち合うことを目標にしました。地域主催のイベントにボランティアとして参加し、バルーンアートやジャグリング、身近な道具を使った簡単なマジックを地域の方々に教え、一緒にやってもらいました。地域の方々は、手品はテレビなどでよく目にする機会はあっても、自分の身近で見たり、自らバルーンを使って何かを作ったりという機会は少ないと思います。実際、子どもたちなどは、バルーンアートをとても珍しがっており、興味津々でした。そんな子どもたちと一緒にバルーンで動物や剣や花を作ろうとすると、最初は恥ずかしがっていましたが、こちらが教えていくうちにだんだん親しみがもてるようになってきたのか、おしゃべりができるようになってきました。そして自分で作

れるようになるととても嬉しそうにしていました。保護者の方にもとても喜んでいただけました。また、自分たちが普段練習しているジャグリングも、子どもたちにとってはとても珍しいもののようで、ジャグリング体験コーナーにとても興味を持ってくれました。私たちがジャグリングの技を見せると、「やってみたい！」と、積極的に参加して、やり方などをきいてくれました。基本的な技ができるようになると、お父さん、お母さんに得意げに見せていました。

また、このプロジェクト事業により、地域の方々に大学生を身近に感じてもらえるようになったと考えられます。幼稚園児や小学生、そして地域の施設の方々にとって、大学生と接する機会は普段なかなかないので、大学生は遠い存在だと思います。そんな大学生がバルーンアートやジャグリングを自分たちに教えてくれたことで、遠い存在だった大学生を少しでも身近に感じてもらえるようになったのではないでしょうか。現に、いつも訪問している学童保育の子どもたちは、私たちをマジックのお兄さん、お姉さんと慕ってくれており、大学生を身近な存在に感じてくれています。子どもたちと一緒に楽しくおしゃべりすることで、保護者の方々にも、「子どもたちのためにボランティア活動をしている大学生」「子どもを楽しませてくれる大学生」という印象を与えることができたと思います。大学生の活動のよい部分を見てもらうことができたのではないでしょうか。

４．この事業が本学や地域社会等に与えた影響

このプロジェクト事業を実施したことにより、地域の方々に、手品・ジャグリング・バルーンアートの楽しさを広めることができたと思います。また、それを通して地域の方々と私たちの結びつきも強まりました。たとえば、繰り返し参加している地域のイベントで、前回見せた手品を家で自分で練習して私たちに見せてくれたり、新たにオリジナルの手品を作って来てくれた子がいました。また、私たちは訪問先で、一方的に見せるだけではなく、お客さん参加型のショーを行うので、とても楽しいとよい評判をいただきました。ある施設での老人会に訪問してショーを開いたのですが、とても楽しんでいただけたようで、「老人たちがとても元気をもらったそうです。次の訪問を楽しみにしています」と言ってもらえました。「ショーを開いてもらって評判がすごく良かったからまた来てほし

い」「前に香川大学の学生たちがとても楽しませてくれたということをきいたから、今回はうちにも来てほしい」などと、良い評判が広がって今年度はたくさんの依頼をいただきました。夏には香川大学ミッドプラザのイベントに参加させていただき、そこで私たちの活動を知って、訪問の依頼をくれた所もありました。

また、香川大学祭に対しても、少なからずこのプロジェクト事業の影響はあったと思います。いつもマジックショーに訪問する施設の方が、私たちのショーを見たり、ワークショップに参加するために大学まで足を運んでくれました。大学祭に来てくれた親子連れの方々には、私たちのマジックコーナーやジャグリングショーは大変好評でした。地域の方々と共に楽しめる大学祭にするといった点で、大学祭にも貢献できたと思います。

５．自分たちの学生生活に与えた影響や効果等

イベントに参加するためには、メンバーみんなで協力しなければなりません。各種イベントを通して、メンバー同士の絆も深まりました。最初はぎごちなかった私たちですが、イベントを通して学年をこえてだんだんと仲良くなり、今ではお互いにかけがえのない存在になりました。私たちは信頼しあえる仲間をつくることができ、大学生活の大きな励みになっています。

また、各種イベントに参加し、マジックショーで各施設を訪問するにあたり、私たちはさまざまなマナーを学びました。小さい子どもにバルーンアートを教える際には、しゃがんで子どもと同じ目線でするというマナー、地域の年上の方々話すときの会話のマナー、依頼を受けるときの対応のマナー、訪問してからのマナーなどです。これらのマナーは普段の大学生活の中だけではなかなか学べないものです。また、お客さんに楽しんでもらうためには、ユーモア溢れる話術が必要です。さまざまな施設を訪問し、マジックショーを行う中で、私たちは人前に立って話すことに慣れ、ユーモアあふれるパフォーマンスができるよう工夫するようになりました。それは、大学の授業や就職活動でも生かせる、プレゼンテーション能力や面接などのときにしっかり話すという能力の向上にもつながると思います。

６．反省点・今後の抱負（計画）・感想等

今年度は、昨年までと比べてたくさんの依頼をいただきました。しかし、訪問しても１時間のショーを行うのがやっとで、それ以上長い時間はできませんでした。今後はもっと長い時間お客さんに楽しんでいただけるようにしていきたいです。このお客さんの年代ではどのようなことをしたら楽しんでいただけるか、どのような話をすればいいのかなど、お客さんとともに楽しむ時間をつくるために工夫することはまだまだたくさんあるので、メンバー内で報告をしたり意見を出し合うなど、お互いに高めあっていきたいです。

最後に、この活動を通して、私たちは多くの地域の方々と触れ合うことができました。さまざまな年齢の方々と交流することで、お互いに楽しい時間をもつとともに、自分たちの世界観も広がりました。地域はそこに住んでいる人々みんなの力でつくられています。活動を通して、それを実感することができ、自分たちも、この地域の一員なのだという自覚をもつことができました。私たちの活動を通して元気になった、楽しい時間をもつことができたという声をきいて、地域のために活動していく大切さを学ぶことができました。木太北部小学校の学童保育など、定期的に訪問をしている所をはじめ、今年度初めて訪問した先とも、これからもつながりをもっていきたいです。

本当に良い体験をさせていただきました。これからも、マジック・ジャグリング・バルーンを通して地域の方々と交流を深めていき、人の輪、そして地域の輪を広げていきたいです。

７．実施メンバー

代表者　小林　洋実（　法学部２年）

構成員　黒川　遼　（　工学部４年）
安政　真央（経済学部４年）
三宅　悠介（教育学部４年）
西森　優真（教育学部４年）
横谷　昌浩（教育学部４年）
末沢　陽子（教育学部４年）
粟村　晧平（　法学部３年）
梶原　愛香（経済学部３年）
上原　由雅（経済学部３年）
吉田　和紀（経済学部２年）
野村　真理（経済学部２年）
西尾　俊史（経済学部２年）
藤田　一平（　農学部２年）
賀美　崇也（　農学部２年）
加藤　拓也（　農学部２年）
大部　泰嗣（　農学部２年）
井上　翔太（　農学部２年）
竹原　孝太（　農学部２年）

古川　数馬（　工学部３年）
佐藤　久仁哉（工学部３年）
船津　佑介（　工学部３年）
池田　健人（　工学部３年）
守分　仁成（　工学部３年）
高木　正和（　工学部３年）
大森　敦美（教育学部３年）
濱　治慶（　工学部１年）
太田　和也（　工学部１年）
宮下　大史（教育学部２年）
宮花　昂平（教育学部２年）
柚木　泰広（　工学部２年）
守脇　永利子（法学部２年）
福岡　和也　（法学部２年）
川本　真理（教育学部１年）
秋山　祥子（　工学部１年）
西岡　圭介（　工学部１年）
大原　紳司（　工学部１年）